
龍を背負った男

夏生ミユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍を背負った男

【Nコード】

N2554E

【作者名】

夏生ミユキ

【あらすじ】

短大を卒業後、1年就職浪人をした後でやっと掴んだ仕事はアパレルの販売員だった。

第1話

「柳井さん、今日あいてる？」
「まだ。」

同じフロアの他ブランドで働く男前がしつこい位に誘ってくる。

「柳井さん...」
「あいてません！」

言いかけた言葉に被せてキツパリ断り、いそいそと休憩室に向かう。いい加減断る言い訳すら思い浮かばなくなってきた。

彼の名は荒木俊。

見事なまでに整った顔とモデル並みのスタイルで女どころか男にも憧れられてるイケメン店長だ。イケメンって言葉が死語のような気もするが、本当にその単語がぴったりハマる。クールで女の子を寄せつけないオーラ全開なのに、どこを気に入られたのか顔を合わせる度に誘ってくる。

「だけどそんなのアタシには関係ない。」

荒木には何故だか近づいてはいけない気がするんだ。女の勘ってヤツ？

喫煙席にいくつか並べられた円卓の空いている席を探し、キョロキョロしていると端の方で手招きしている人がいる。紳士服飾部の川島統括マネージャーだ。結構偉い人なんだろうけど、長めの茶髪に黒い肌がなんともチャライ。体内に浸透してくるような低い声と甘い香りが印象深く、常に女の影がちらついてる感じだ。イヤらしさ満載の魅惑の笑顔が最強の武器で、目が合うと妊娠するって噂まである。

「お疲れ様です」

この時間帯は夕方の休憩のピークらしく、他に円卓は空いていない。見渡す限り仲良しの知り合いも見当たらず、仕方なく呼ばれた席に向かう。

せっかくの休憩も取引先の上司と一緒にだなんて、本当に今日はずいてない。

そそくさと席について煙草を取り出す。

「あれっ？」

カチツと音はするもののガス切れでなかなか火が点かないライターに手こずる。何度もカチカチ鳴らしていると、横から火が差し出された。

「あ、どうも」

「恐れ入ります、だね」

頼んでないし・・・と内心思っただけで頭を下げた。正直面倒臭い。正

日曜のくそ忙しい日に、ただでさえ慣れない立ち仕事で疲れもピークなのに、こんな所でダメ出しだなんてちよつとイライラする。だけど、しがない短大卒で、しかも1年就職浪人してやっと受かったアパレル会社を首になる訳にはいかない。せめてあと3年位は働いて、その間に未来の旦那様を見付けなければ…。

会話もなく黙って自分の吐き出した煙の行方をぼんやりと見詰めていた。

「今が踏ん張り時だね！今日夜ちよつと行こっか」

引きつった頬が固まる。アタシにも都合つてもんがあるんですけど…。

いないに等しい彼氏は働いたと同時に音信不通だし、明日休みなのに別にこれといった予定はないけれど、結局暇なだけだね、それでも強引過ぎやしないですかね？

「あ、でも、アタシ…」

「じゃあ、仕事終わったら社員通用口で待ってて」

あわあわと口ごもっている間に話は終わっていた。ついでに休憩も終わった川島は1人で席を立ち、背中を向けたままヒラヒラと手を振って去っていった。

第2話

社員通用口を出た辺りでぼんやり突っ立っていた。イヤホンを耳に突っ込んで流行りのJ・POPを聴きながら川島を待った。

「何聞いてんの？」

7センチヒールを履いたアタシより15センチ以上は背の高い荒木が、左耳からイヤホンを抜きとって自分の右耳にあてる。その身長差で右耳からもイヤホンは抜けてしまった。

「止めて下さいっ」

荒木の手からイヤホンを奪い取ると、大きく一步横にずれる。

「で、誰待ち？」

「.....」

荒木の誘いを散々断っておいて、川島と飲みに行くとは言えずに聞こえなかった振りをした。

「まあ、いいや。じゃあまた」

予想外にあっさり解放された事に驚いた。細身のスーツをきつちり着こなした背中から視線をそらし社員通用口に目をやると、みんな疲れた様子で駅に向かって歩いていく。

アタシだって日曜日は週報があるので通常より残業で遅くなっているけれど、それにしても遅い。いい加減帰ってしまおうかというイラし始めた時、川島が現れた。

華やかなオーラとレーザーソールの高い音を響かせて近づいてくる

川島からはほんのり甘い香りがした。

「お待たせ。じゃあ行くうか」

駅とは逆方向に歩き、日曜の夜なのに人が多い繁華街で川島とはぐれてしまわないようぴつたりと後ろからついていく。人混みを抜けると閑静な住宅街が見えてくる。どこに連れていかれるのかとびくびくしていたら、小さなY字路の角にあるビルの中に入っていく。

階段を登った2階の店に慣れた様子で入っていく。どうやら川島の行きつけの店のようだ。

「いらっしゃーい」

藍染ののれんをくぐると、中は6人座れば一杯になるカウンターとこあがりか2席だけのごじんまりとした小料理屋だった。明るい声で迎えてくれる40代後半の女将さんの笑顔に、一瞬で癒される。「あら、てっちゃん。随分可愛い彼女ね」

女将さんの言葉に川島はニヤニヤ笑うだけで否定する気配がない。アタシは慌てて首を横に振った。

「違いますっ！あの・・・」

「そんなに必死に否定することなくね？コイツは取引先の新人ですよ」

コイツって・・・いきなりなんなのよ。

仕事中とは雰囲気も言葉遣いも全く違う川島に戸惑いつつも、ラフな空気感に少しずつ肩の力が抜けていく。川島は女将さん目配せをしてこあがり座り、突っ立っていたアタシにも席につくように促す。席について一呼吸すると、タイミングよくおしぼりが渡され、それからすぐに付け出しとグラスが2個ずつテーブルに置

かれた。

「お疲れ様」

女将さんが川島にビールを注ごうとするのをぼんやり見ていると、川島がアタシの足をテーブルの下で小突く。

我にかえって川島の顔を見ると小さな声で注意された。

「お前がやんの！」

女将さんはアタシに瓶ビールを手渡すと、後はよろしくね、と言ってカウンターの中に入ってしまった。

慣れない手つきで川島にお酌すると、今度は川島が瓶ビールを手にしてアタシにグラスを持つように急かした。

「あの、アタシビール飲めないんですけど・・・」

上目遣いで川島に訴えるが、えげつない言葉で却下される。

「何言ってるんだよ！もっと苦いもん飲んでんだろ？」

なみなみと注がれたビールを見ながら、何でここに来る事を断らなかったのか後悔した。

それから2時間近く川島に付き合って飲んでいた。

いつの間にかビールから焼酎にかわり、氷や烏龍茶を入れてはマドラーでかき混ぜる。ホステスにでもなったような気分だ。

気がついた頃には天井が少し歪んで見えた。

「あらあら・・・大丈夫？てっちゃん飲ませすぎよ」

心配そうに背中をさすってくれる女将さんに、アタシは呂律の回

らない口で挨拶した。

「らいいりよーぶれすう。ご馳走様でしたあ・・・」

「おい、柳井・・・帰るぞ」

いつの間にか会計を済ませた川島に脇腹を抱えられながら千鳥足で階段を下りる。

飲み慣れない甘くない酒にすっかり泥酔したアタシはやっと眠れる安心感に隙だらけになっていたようだ。

ビルを出て駅に向かって歩きだそうとしたアタシは脇腹を掴まれていたせいでその場で足踏みをする間抜けな行動をしてしまう。

「あれ・・・？」

暫く気がつかずにじたばたしていたアタシの様子を見た川島が笑いを堪えながら口を開く。

「お前明日仕事？」

「……いえ、あ、仕事れすう」

泥酔状態にもかかわらず、保身の為に慌てて言い直した。

「分かりやすいんだよ。休みならもうちょっと付き合えよ」

第3話

有無を言わずに、大通り脇に止まったタクシーの列に引きずられていく。

「もう無理れすう…。」

1人では立っている事も出来ない。
むしろ、川島に支えられているというより完全に寄りかかっている。

「ちゃんと面倒みてやつから」

タクシーの後部座席に押し込まれ、後から乗り込んだ川島の肩に寄りかかった。心地よい揺れにウトウトと頭を垂れ始めると、すぐにデコピンを食らう。

「痛っ！何すん…」

「ついた」

タクシーを降りたところから記憶が飛んで、次に気がついた時は壁際に並べられた華奢な高脚の椅子に座っていた。

「おい、上司より先に寝んな」

煩い位に鳴り響く重低音に重い瞼を開くと、暗闇の中でキラキラとライトが光る。前に立ちはだかった川島が片手をアタシの顔の横についた。

近い。

徐々に視界にアップで映る顔はとても彫りが深く綺麗だった。甘い香りと騒音に近い音楽に意識が遠のきそうになるのをなんとか堪えた。

「あ．．．川島マネージャー、此処どこれすかあ？」

聞こえずらい声を聞き取る為に川島の顔が更に近づいてくると、反射的に顔を背けた。本能が訴えるんだ．．．危ないって。

それにしても10才位年の離れた川島とこんな状況に陥るなんて思いもしなかった。

「クラブ。たまにはよくな？」

日曜だからかそんなに混んではないけれど、狭い空間に密着しているせいか異常に暑い。

汗で首筋にへばりついた髪を川島に払われて驚いて顔をあげる。

「まあいいから飲んどけて」

川島は片手に持っていたショットグラスに口をつけると、そのまま唇を重ねてきた。

「ンンツ…は、あ…」

1度川島の口内で温められたテキーラが、肉厚な唇の小さく開けた隙間から流し込まれた。灼けるような喉の熱さと艶めかしい唇の感触に力が抜けた。押し返そうと胸板に手をやるもなんの意味もない。

もう1度同じ行為が繰り返される。飲み込みきれないアルコールが、晒した首筋を伝って深く開いたVネックの胸元に滴り落ちた。

「はぁ…」

自分の吐く息にすら酔う。

一人で座っている事すら出来ずに前に倒れ込んで川島の肩に額をつけた。

「…わざとかよ」

川島の低い声は、鳴り響く重低音に飲み込まれた。それと同時にアタシの意識も浅い眠りの中に吸い込まれていった。

第3話（後書き）

次回少しエッチな感じになりますので、苦手な方はとばして下さい
ますようお願い致します。

第4話

自分の意志とは別の所で体が動いている。眠くて仕方ないのに横になることも出来ず、体を支えられながら重い足を引きずって歩いた。強い睡魔で瞼も開かず、今いる場所が何処なのかも分からない。

「重い…」

重厚感のあるドアが締まる音がすると、ベットに投げ出された。

頬に触れるその待ち望んだ柔らかい布団の感触に、すぐに眠りに落ちた。

「おい、早くシャワー浴びてこいよ」

川島の言葉が夢の中で小さく聞こえた気がした。

#

この状況で無防備に寝息をたてる女を初めて見た。

近寄って乱れた髪で隠れた顔をまじまじと見詰め、鼻を摘んでみる。鬱陶しそうに眉間にシワを寄せて寝返りをうっている。

演技なのか、本気で寝てるのか？

「このまま襲うぞ…」

短いスカートがずり上がって太股が露わになると、元来の目的を思い出した。無抵抗な彼女の体に跨って、一応顔の前で手を合わせる。

「では、遠慮なくいただきます、と…」

服の上から胸にそっと手を伸ばす。手のひらに収まりきらないその大きさに期待が膨らんで、にやけてしまう。

確かめるようにニットをたくし上げて肌に直接接触れるが、無反応。調子に乗ってブラジャーのホックを外してみる。

「うう．．．ん」

窮屈に押し寄せられた胸が解放されて弾んだ。心なしか、触れた肌が熱くなった気がした。

「やべえな、処女犯してるみてえ．．．」

異常なまでに興奮している自分に気がついた。はやる気持ちを抑えきれずに執拗に味わっていく。

未だに眠り続ける取引先の新人は、あられもない格好で時折喘ぎのような寝言を漏らしている。

スカートに手をかけ、強引に剥ぎ取ろうと足首を掴んだ時、大きく目を見開いた彼女と目があつた。しかも彼女の太股の間で．．．。

「やっ！やめ．．．」

自分の置かれた状況にやっと気づいたのか、クネクネと体を擦って逃げようとしている。だけど、その淫らな動きがどう考えても挑発していると思えない。

「誘つてんの？」

「違いますう。お願い、止めて…」

弱々しく涙目で訴える彼女に、一瞬手が止まる。

「マジで処女なの？」

首を横に振って、開かされた脚を閉じようとしている。なかなか出逢わないエッチに奥手な女にモチベーションが上がる。

「あつそ。じゃあもうイケんな！」

「変態〜！」

斬新だ。

この状況で断られた事なんてない。嫌よ嫌よも好きのうちで、大概建前だと思っていたが組み敷いた女は本気で逃げようとしている。ただ、泥酔している為若干動きが面白いけど……。

#

不覚にも先にイカされてしまった。

「あおう……」

全裸のままベットの縁に腰掛けて快感の余韻に浸っていると、彼女が不安げな様子で正座をして顔を覗き込んでくる。

素人の、10も年の離れた相手に呆気なくイカされてしまった事実が信じられなくて、冷静になるにつれて笑えてきた。

「あははは……」

急に笑い出した俺にビクリと体を震わせ、再び顔を覗き込んでくる彼女と目が合った。

「あの……アタシ何か気に障るような事しましたか？」 「俺がイカされちゃったよ」

恥ずかしそうに彼女も笑った。

ある襖の奥から微かに水音が聞こえてきた。

「川島マネージャー．．．？」

名前を呼びながら襖の奥に進んで行く。忍び足のつもりが板の間が古くて軋み、川島にすぐに気付かれた。

「起きた？一緒に入ろーぜ」

スリガラスに川島の姿が浮かんでいる。褐色の肌が徐々に近づいて、ガラス戸が派手な音を立てて開いた。股間を隠しもせず、濡れた手でアタシの腕を掴むと中に引き入れる。

「キヤーツ！」

体を隠すようにその場にしゃがみこむ。

「何恥ずかしがってんだよ。昨日がうちりヤツてんだから．．．」

「わゝ！何を言ってますかー！」

恥ずかしくて、しゃがんだままゆっくりと上目遣いに川島を確認する。湯船に浸かり、バスタブに腕をかけ、その上に顎を乗せてこちちを見て苦笑している。

「変な奴．．．」

「あっち向いて下さい」

背中を向けた川島を確認して立ち上がろうと視線をそらしたが、直ぐに振り返る。

「！ー！」

広い背中に浮かぶ藍色の双頭の龍に目が釘付けになった。初めて目の当たりにした刺青に恐怖で声が出ない。力強く刻み込まれた龍に睨まれているようで膝がわらう。無意識に呼吸が荒くなり、その場で固まって動けなくなつた。

「何ボーっとしてんだよ、早くしろよ」

川島の声に我に返ると、物凄い勢いで髪と体を洗つた。気を使つて後ろを向いたまま待機してくれているのが逆に恐い。

「あのおう．．．終わったので先に出ますね」

再び背中の龍に釘付けになり、謔言のようにそつ言つて立ち上がると、湯船のお湯が高い音を立てて揺れた。

「いいからこつち来いよ」

「．．．．．ですよね」

結局川島の足の間に座るように手招きされて、断る事も出来ずに従つた。

川島の足の間で小さく固まつたまま大人しくしている。色んな噂をジャブ程度に聞いていたから余計に想像が膨らむ。本当はそつちの筋の人なんじゃないか．．．とか。

「お前、名前何だっけ？」

アタシの長い髪の毛が湯船の中を泳いでいるのを指に絡めながら川島が言つた。

「．．．．．柳井です」

「それは知ってる」

川島の手がアタシの頭を撫でる。それは緊張を解きほぐすようなゆっくりとした動きだった。

「あ、有紀です」

「．．．．．有紀、もう一回やるとく？」

何でだろう？

凄く恐いはずなのに、徐々に癒されていく感じ。これが大人の包容力ってやつなのか．．．？

第6話（前書き）

なんだかんだで、流されるままに川島にやられてしまった有紀。だ
けど、まんざらでもない！？

第6話

いかがわしいホテル街から仰ぐ空は濁りのない青で、後ろめたい気分だった。

「朝飯食おうぜ」

川島の言葉に否定も肯定も出来ず、ただ後ろからついて行った。近くにあった喫茶店に入りモーニングセットを注文して一服する。

「はい、これやる」

向かい合わせに座った川島が、テーブルの上に名刺を滑らせてよこす。それを拾い上げて美味しそうにタバコを吸う川島と交互に見ていたら、無意識に溜め息が漏れた。

#

マネージャーとやっちゃったよ・・・

#

働きだしてから彼とは自然消滅していたから、エッチ自体も久しぶりだ。まさかこんなシチュエーションで一夜限りの経験をしてしまっなんて、自分じゃないみたいだ。

今までは付き合った人としかしなかったし、しかもこんなに年の離れた相手は初めて。

今までの彼とのエッチは本当に億劫だった。だけどしなければ彼が離れてしまうという不安から仕方なくやっていた。だから川島とのエッチは本当に驚いた。

大人ってスゴい・・・って感じ。

名刺に印刷された肩書きが実際の川島とはあまりにもかけ離れている感じがして苦笑いしてしまう。

「川島さんって、ほんつとに勝手．．．」
「そう?。」

短くなった煙草をもみ消しながら興味なさそうに川島が答えた。

#

家に帰ると、何だか全てが夢だったような気がした。

ベットに寝そべって、川島から貰った名刺を取り出すと名刺の裏には手書きで携帯の番号が記してある。

「紳士服飾部統括マネージャー．．．川島徹平．．．か．．．」

覚えている限りの川島との会話を思い出しては1人でにやつく。

強引に組み敷かれ、拒否も出来ずに川島にしがみついた時の肌の感触が忘れられない。

背中一面に彫り込まれた藍色の双頭の龍が天に登って泳いでいた。その何とも言えない微妙な肌の凹凸感が指先にこびりついていた。

第7話

今日は早番だ。

早番の時はタイムカードの打刻30分前に、百貨店近くの安いコーヒーショップで一服するのが常だった。

「有紀、おはよー」

同じフロアの他ショップで働く綾子が既に一服している。

彼女は服飾系専門学校を卒業して今年入社同期だ。まあ1才年下だけど…。

これでもかかって位にマスカラを重ね塗りして、特殊メイクのように太くアイラインをひいている。所謂ギャルだ。

長い茶髪をこたで巻くために出勤前は必ずこの喫茶店にくる。

「ね、次の日曜日さ、うちの歓迎会だよ！覚えてる？」

すっかり忘れていた。

元々酒好きの多いメンズチームは何かにつけて飲み会を開きたがる。配属初日に既に飲み连接到行かれてるし、そういう事に消極的なアタシはあまり乗り気じゃない。

「アタシは、いいかな…。」

「駄目！荒木店長もくるし、有紀んとこの…越智店長も来るんだから！」

知らぬ間に段取りされてる…。

綾子は荒木ファンだ。

それは知っていたけど、女の子が絡むと飲み会に出席しないことで有名な荒木をどうやって誘い出したんだろうか？

「荒木店長引つ張り出すの超大変だったんだからあ」

満面の笑みで話し出す。

綾子の話は大抵男の事で、呆れるっていうのを通り越して感心してしまう。

「直談判したの？」

綾子はテンションが上がりきってしまったのか、オーバーリアクションで説明し始める。

「まさか！佐伯に取り入ったんだよ」

綾子が得意気に鼻をすすったのが何だか可愛くて笑ってしまう。

「ちよつとお、佐伯だよ！さして飲み行っただよあ」

「佐伯って誰よ？」

さつきから綾子の話に出てくる【佐伯】という人が誰なのかが分からないから、いまいち大変さが伝わってこない。

「荒木店長んとこの新人のギャル男。あたしギャル男ダメなんだよねえ……」

綾子がギャル男が苦手なんて意外だ。凄く似合うような気がするけど……。

出勤時間の迫ったアタシ達は、飲み会に参加するという約束をし

て仕事に向かった。

第7話（後書き）

積極的な綾子に押され気味の有紀。そもそもこの2人がなんで親しくなったのか不思議だ…。

第8話（前書き）

1週間なんてあっという間。新人歓迎会という名のただの宴会に嫌々行くことになったけど、何だか嫌な予感がする…。

第8話

「柳井、あと頼むわ!」

越智店長が週報を書き終えると、新人であるアタシを1人残して一足先に新人歓迎会に向かった。

「かしこまりました」

どこの店もシーティングがされ、人の気配がしない。

全然乗り気じゃないけれど、どうせ行くならもつと楽しい気分で行きたい。

「あゝ、もう!ファックス流れないよ・・・」

ついつい1人言が大きくなる。

22時を過ぎて見回りに来たガードマンに変な目で見られた。

今頃綾子は、確実に泥酔してるはず。2人で飲みに行っても大体そつだ。大好きな荒木も来ているし、絶対弾けてる・・・。

「こんな時間に行ったって絶対食べ物ないって・・・」

とつくに営業の終わった百貨店に1人取り残されたアタシは文句をたれながら会場である近くの安い居酒屋へと向かった。

居酒屋のアルバイト店員とは既に顔見知りになる程通いつめているため、何も言っていないのに奥の座敷に案内された。

「はあ．．．」

襖を開けるのを一瞬躊躇った。

予約は9時から入っているはずだから1時間半の遅れがある。みんなのテンションについていけない自信がない。

意を決して襖を開けようと手を伸ばした瞬間、視界を遮る物がなくなっただ。

「ああ．．．柳井さん、お疲れ」

古びた座敷の宴会場が全く不似合いな荒木が目の前に立っていた。乱れた長めの前髪をかきあげながら自分の革靴を探している。

「あー、有紀い！荒木店長止めてえ」

予想通り泥酔した様子の綾子が前につんのめった格好で叫んでいる。

「悪いけど先帰るわ…」

不機嫌そうな様子で靴紐を結び直す荒木をぼんやり見ていると、極度に細いギャル男が慌てた様子で走ってきた。彼はひたすら荒木に謝っている。

「荒木さん、ほんとすいません！」

同じ言葉を繰り返す彼が酷く痛々しく見えた。

「佐伯、もういいって…」

荒木は鬱陶しそうに立ち上がると、黄色い歓声に脇目も振らずに立ち上がって帰ろうとする。

「・・・何？」

急に荒木の視線に捉えられ自分の手元を見てみたら、彼の腕を掴んでいた。

「否、あの．．折角だし、もう少し飲んでいきませんか？」

口をついて出たアタシの言葉に、騒がしかった女性陣の歓声と弱々しく謝り続けるギャル男の声が途絶えた。

「マジで？」

「え、あの．．」

荒木の表情がパアッと明るくなった。
嫌な予感だ。

「じゃあ折角だし行こうか！」

掴んでいた手を逆に握られて出入り口の方に引きずられていく。

「ちょっと、何？お、越智店長」

遠ざかっていく宴会場を振り返ると、ギャル男が申し訳なさそうに顔の前に両手を合わせて何度も頭を下げていた。

第9話

荒木にすっかりと手を握られたまま100メートル程歩いた所で腕を振りほどいた。

「もう、痛い！」

歩幅の違う荒木に足早に歩かれ、ピンヒールですつと走らされたアタシの足は限界だった。立っていられなくてその場にしゃがみこみ、爪先をさする。

「ゴメン・・・浮かれてた」

申し訳無さそうに髪をくしゃくしゃと掻きながら謝る荒木にちょっと怯んだ。

何？何？いつもと全然違うんですけど・・・！

しゃがみこんだアタシの隣に屈んで、顔を覗き込んでくる。

「立てる？」

さりげなくアタシの手からバックを奪い、もう片方の手で再びアタシの手を握った。

周囲の女性の羨望の眼差しが集中しているのが分かり、自分の顔が熱くなっていくのを感じた。

だって少女漫画に出てくる王子様のようなはにかんだ笑顔でそんな優しくされたら、好きじゃなくてもドキドキしてしまう。

立ち上がってずり上がったタイトスカートを直し、荒木に奪われた自分のバックに手を伸ばす。

「自分で持てます……」

「これ位させてよ……ね？」

うっかり荒木の王子様加減にやられ始める自分を何とか制する。

危ない、危ない……。

「早くみんなの所に戻らないと！きつと待ってますよ」

荒木に握られた手に力が込められ、顔をあげると真っ直ぐな視線に捕らえられた。

「やだよ……、やっと柳井さんとデート出来るのに……」

はい??今何て言いましたか?
新種のゲームか何かですかね?

普段は無表情でクールなイメージの荒木が、遠回しの告白まがいな言葉を連発しながらふてくされていいる。アタシの頭の中はさつきから自問自答を繰り返してパニック状態だ。

「ねえ、終電まで付き合ってくんない？」

長身のイケメンに口説かれるのに慣れていないアタシは、少し戸惑いはあるものの、断りきれなかった。

「でも．．．」

「大丈夫！ちゃんと送るから．．．」

弱すぎる否定の接続詞を遮って半ば強引に迫ってくる荒木のペー
スに乗せられてしまった。

「どこかアテある？俺が決めちゃっていい？」

#

タクシーに乗り、訳も分からぬままに荒木の行きつけの店に連れ
て行かれた。

246号を左手に曲がり、住宅街に続く細い路地でタクシーを降
りた。

三宿辺りという事しか分からない。

「マスターいい人だし、食いもんも旨いから気に入って貰えると思
うよ」

いつになくハイテンションの荒木に一抹の不安を感じながら後に
ついて行く。

木目調の緩やかな階段を登り、ガラス戸を押すとカウベルもどき
の音が店内に響いた。

「2名様ご来店です」

職場での雰囲気とは全く違う荒木に戸惑いながら、店内をキョロ
キョロと観察した。

「荒木くん、久しぶりじゃん」

先客の中に混じってタバコを吸っていた40代半ば位の男性が、
荒木の声に気付いてこちらに向かって歩いてきた。

「葵さん、ここいい？」

「座って座って」

優しそうな細い目に鼻の下に蓄えた髭が如何にもマスターっぽい。

ただ、荒木と話しているのに アタシをチラ見しているのが凄く
気になる。

「あの・・・」

思い切って声を出してみる。 荒木が席に座り、向かい合う席に
アタシを座るように勧めた。

「マスターの葵さん」

紹介を受けた葵は軽く会釈した。 荒木がアタシの事をなかなか紹
介しないのに我慢出来なかったのか、直球をぶつけてきた。

「荒木くんの彼女？」

荒木は満面の笑みだ。

恥ずかしがる様子もなく、アタシを見詰めたまま葵に言う。

「まだ。今猛アタック中…、ね！」

ふざけてるとしか思えなかった。

こんなに格好いい年上の男がアタシに本気だなんて、信じられな
い。

頭に血が昇って、アタシの口は勝手に動き出す。

「あ、荒木店長にはいつもお世話になってますっ」

#

嫌な間が空いた。

ご機嫌だった荒木の顔から笑顔が消え、葵は残念そうに肩を落とす。

一転して気まづくなった雰囲気にならず、慌ててタバコに火をつけた。

「ちよつと悪い・・・」

突然荒木が席を立って店を出て行く。カウベルもどきが虚しく音を奏で、より一層沈黙が際立った。

#

え、アタシそんなに逆鱗に触れる様なこと言っただけ？

#

自分の何がいけなかったのか理解出来ぬまま、時間だけが過ぎていった。

第10話(前書き)

思考が全く読めない荒木に振り回される有紀。荒木のホームドラマ
ンドでかなりアウェイな感じは否めない…。

第10話

機嫌を損ねてしまった。

もしかして戻って来ないとか、そういうオチないよね・・・。

#

「昔はさ、色々あったんだけどねえ。ここ何年か荒木くん、身持ちが堅いつてゆーか・・・。なんだ・・・違うんだ」

残念そうに言う葵に今更取り繕ってみた。

「・・・・・・・・すいません。でも、荒木さんモテるみたいだから・・・

」。

初対面の葵にどう接して良いのか分からず、なるべく目を合わせないようにした。

今更ながら自分の軽率な言葉に反省してしまう。

沈黙が続く途方に暮れていると、背後から愛想のない声が降ってくる。

「俺の噂？」

心配も必要なかったくらい早く戻ってきた。

アタシと向かい合って座る荒木は、長い脚を持て余し、テーブルの下でしきりに組み直している。本当にモデルみたいだ。

「あ、いえ・・・」

勝手な事を言っただけに更に事態が悪化するのが面倒で、言葉を濁した。それなのに葵はアタシの心の叫びを完全無視だ。

「そうそう！荒木くんがフットワーク軽かった時の話とか・・・」
「そんなの10年前だし・・・」

2人の会話をハラハラしながら聞いていたが、つき合いが長いらしく、昔を懐かしんでいるだけのようだ。

「相変わらずモテモテ？」

「顔と体目当ての女は寄ってくるけどね。そういうのモテるって言わないっしょ？」

葵のからかう言葉も完全スルーで、イケメンの余裕を見せつける。

「ビールでいい？」

荒木は、2人の会話を他人事のように見ていたアタシに不意をついて話し掛けてくる。

「あつ、はい」

「葵さん、コロナ2個ね。ちゃんと働いてよ！」

なんか、いいな。

気を使わなくて済む行きつけの店があるって、大人な感じがする。

荒木は何品か食べ物を頼み、自分の事を話し始めた。

#

実家が九州で、大学に進学する為に東京に出てきた事。

趣味は音楽で、今でも大学時代の友達とクラブを貸し切ってオーガナイザーをやったりする事。

30才になったら実家に帰って家業を継がなくてはならない事も。

#

荒木の話は育ちの良さや、生活の余裕を感じた。全く嫌味っぽくはなかったけれど、自分とは違い過ぎる環境に共感しなかった。

荒木のビールがなくなった頃を見計らって携帯の時計を見ると、日付が変わる15分前だった。

「終電何時？」

アタシの仕草を見ていた荒木が、思い出したように時計を見る。そんな荒木を見て、すんなり帰れそうに安心した途端に、不覚にも酔いが回ってきた。

第10話（後書き）

あまりの緊張で自分が酒に弱い事をすっかり忘れてた！知った仲じやない人との酒の席はアルコールとタバコがやけに進む…。

第11話

店を出ると、辺りは真っ暗で人通りがない。遠くに見えるコンビ
二の灯りだけが目立っていた。

「家、何処だっけ？」

背の高い荒木の2、3歩後ろを歩く。

荒木もかなり酔っているのか、ゆっくり歩いてはいるけど歩幅が
違い過ぎてついて行くのに必死だ。

スーツを着た後ろ姿をぼんやり見詰めた。

細長いシルエットに艶やかな黒髪、少し猫背だけどそれがまた絵
になるって感じ。

「ねえ、聞いている？」

考え事をしていたら、足が止まっていた。
でもどこかしっくりこない。

レザーソールの高く響く足音も、海水で少し痛んだ茶色の長い髪
の毛も、背中から滲み出る憂いも、そこにはない。

「ねえ」

大きな声で呼び掛けられて、少しあいた距離を戻ってくる荒木の
無表情を見上げた。

「誰の事考えてた？」

荒木の眉間に深く皺が寄った。

問いかけに押し黙ったままでいるアタシを、確信を持った言葉で射抜く。

「当ててあげようか？．．．川島だろ」

霞がかかっていた視界が一気に晴れた。

それと同時に感じ続けていた違和感が理解出来る。

#

アタシが今まで一緒にいたのは荒木さんで、川島さんではないってこと。

#

ずっと川島さんの影を追い求めていたってこと。

「．．．何も言わないって事は凶星？」

慌てて頭を横に振った。

「いえ、そんなんじゃないありません」

「じゃあ何考えてた？」

前に立ちはだかった荒木の不機嫌な顔を直視出来ずに下唇を噛んで俯いた。

「今まで飯食って、酒飲んで、話して．．．俺といる間にずっと川

島の事考えてたんだろ？」

苦しくて、怖くて、アタシは俯いたまま頭を横に振ることしか出来なかった。

「何か言えよ」

荒木の大きな手がアタシの両肩を掴んで揺さぶった。

「……ごめんなさい」

やっと絞り出した声はとても小さくて、聞き取る事さえ困難な程だ。

「……勝手にしろ」

掴まれていた肩から手が外されて熱が逃げていく。

立ち去っていく荒木の足音が徐々に遠くなり、アタシは極度の緊張から解放されてその場にしゃがみ込んだ。

辺りを見渡しても人通りは無く、一列に並んだ街灯が涙でぼやけて見えるだけだ。

「もお……ここ何処よ……」

時計を見ると、日にちが変わっていた。今から駅を探して……なんてやっていたらもう終電はなくなるだろう。

途方に暮れて暫くうなだれていた。

タクシーさえ通らないこの場所で、為す術もなく携帯を弄っていた。

「そっだ……！」

川島に貰った名刺を財布の中から取り出した。

自分からかけることはないと思っていたから登録せずにいたが、名刺の裏に電話番号が記されていた事を思い出し、出てくれる事を祈りながら電話をかけてみる。

だけど、そんなアタシの想いは届かずに6回コールの後留守電に切り替わった。

諦めて携帯をバックの中にしまい、深く溜め息をついた。何だかそれだけで幸せが逃げていく気がする。

体がだるい。

悔しいやら切ないやら、アルコールで高ぶった感情をコントロール出来ずに涙が次から次に溢れ出てくる。

不意に自分以外の人の気配がして顔をあげると、髪を乱し、息を切らした荒木が立っていた。

「・・・まだ何か用ですか？」

怒らせてしまった荒木を睨みつけ、気丈に振る舞ってみる。だけど、荒木から先程の怒りの感情は見受けられなかった。

「ゴメン。俺・・・やっぱり、柳井が好きだ・・・」

ストレートな告白に回転の遅い頭はパニックを起こした。

涙でぼやけた荒木の輪郭が、徐々にはつきりしてくる。一重だけでも黒目がちな大きな瞳も、鷲鼻一步手前の高い鼻も、肉感的な下唇も、全てのパーツがイケメンな要素で、完璧な顔に目が釘付けになる。

CGアイドルみたい・・・肌も凄く綺麗・・・

荒木の顔に見とれていたのも束の間で、唇に感じる柔らかな感触に我に返った。

第11話（後書き）

川島も勝手だけど、荒木もかなりなもんで……。やっぱり、先に唾つ
けといたもん勝ちって事でしょうか？

第12話

え、え、アタシ荒木さんにキスされてる！！

突然のことに驚いて荒木の胸板を押し返そうと腕に力をこめるが、そんな非力はなんの役にも立たない。

無理矢理こじ開けられた唇の間からねっとりとした荒木の舌が入って強引に絡められる。

「はぁ…」

荒木の吐息が聞こえ、思考がおかしくなっていく。

甘いキスだった。

不覚にも受け入れてしまう自分がいた。唇が解放された後も、荒木にしがみついたまま暫く動くことが出来ない。

それを承諾の合図とみなした荒木の行動は、更にエスカレートしていく。

「すぐそこうちだから今日は泊まっていきなよ。」

「でも…」

耳元で囁かれ、腰に腕を回して半ば強制的にお持ち帰りされてしまっ。

もつとつにでもなれっ

アルコールにやられた体はだるく、足が異常に重たく感じた。歩く事すら億劫で、全体重を荒木にかけてまま何とか足を前に出している。

これが良くない事だと頭の片隅では分かっているのに、今すぐにも横になりたい一心で拒否する事すら出来ない。

「もお眠いですう．．．。すみませんが玄関先でいいんで泊めて下さい．．．ふう．．．」

「玄関先？最初がそれ？．．．それもいいかもね」

荒木の表情まで窺う余裕はなかったが、明らかに言葉尻はイヤらしい意味合いが込められている．．．．その時は全く気にする余裕はなかったけれど。

遠くに見えていたコンビニに立ち寄って、2リットルの水のペットボトルと滋養強壮飲料を2つ買い込んだ。

マンションに着くと、エレベーターのボタンを押した。

「2階なんだけど歩けないでしょ？」

荒木は完全に寝に入ったアタシを片手で必死に支えながら買ったばかりの滋養強壮飲料を一気に飲み干した。

「久しぶりだからね、頑張っちゃおうかな．．．」

荒木は自分に言い聞かせるように呟くと、ドアを開けて段差のほとんどない玄関にアタシの体を横たえた。

「ふう．．．」

買ってきた水を冷蔵庫に入れてからスーツのジャケットを脱ぐと、ゆっくりとした足取りで玄関先に戻ってくる。

微かに残っている意識の中で荒木が響かせる様々な音が、子守歌のようにアタシを眠りに誘う。

「柳井、ベットで寝ろよ」

荒木が体を揺り動かした反動で、シャツの第3ボタンが外れて胸の谷間とブラジャーが覗いた。

「ヤバい．．．」

切羽詰まった荒木の切ない吐息が顔から少しずつ下に降りていき、胸の辺りで止まる。

「うう．．．ん」

長くしなやかな荒木の指がアタシのシャツのボタンを外していき、

下着の上から胸の膨らみをなぞり、そのままやんわりと手のひら全体で揉んだ。

「ここもいいんだけど．．．ね．．．」

上擦った声で呟くと、アタシを軽々と抱き上げた。

第13話(前書き)

エッチなシーンがあります。苦手な方はご注意ください。

第13話

浮遊感に眠りはより一層深くなる。

冷たい布団の感触に足を擦り、幸せな時間を迎えようとしたその時、他人の熱を体中に感じた。

手で払う仕草で迫り来る他人を遠ざけようとするが、それも虚しく空を斬る。

それでも懲りずに内股をさする他人の手に、寝返りを打ってかわそうとしたけれど固定されてしまい動けない。

「うづうづ」

吸いすぎた煙草のせいで、オッサンのような声になっていた。纏わりついて離れない他人の体温が鬱陶しくて渋々目を開けると、見慣れないインテリアに酔いがさめてくる。

「ちよつと！！なにやって・・・」

腰から下を固定されているため上体を肘で起こして足の方を見ると、日の出のように自分の股の間に頭が見えた。

その時、聞き覚えのある携帯の着信音が聞こえた。

「！？」

「こんな時間に電話？」

荒木が顔を上げて、的確なポイントに指を這わせる。きつと川島だ。

登録していない番号からの着信音は、静かな部屋にやけに響いた。アタシの動揺っぷりに荒木の顔色も曇ってくる。

なんだか嫌な予感・・・

「出なよ」

触れた指が動き出す。

凍りついたように身動きがとれない。

逃げる事も電話で助けを呼ぶ事も出来ずに、荒木に弄ばれていく。

15秒間の着信音がピタリと止まると、荒木の強引な行為は最終的なものになった。

「お願いっ・・・ヤダよ、止めてよぉ・・・」

下腹部に当たるその異物感に身を擦った。

「ちゃんと・・・責任は、取るから・・・」

荒木の途切れ途切れの言葉なんて耳に入らない。中途半端な抵抗も、徐々に快感にすり替わっていく。

そしてアタシは意識のないところで口にしてしまった。

絶対に言葉に出してはいけない固有名詞を・・・。

「川島さ・・・ン・・・」

一瞬にして空気がどよめいた。

覆い被さっている荒木の動きが止まり、鋭い目つきで睨まれた。

「また川島かよ．．．」

またって何？

荒木の言葉の意味を考えている間にも無理矢理の行為は続き、体は麻痺して脳が正常に働かなくなっていく。

荒木が川島に思ってたのに、声を聞くと全くの別人って事を確認させられる。

理性も吹っ飛ぶほどの強烈な快感に涙が止まらない。

縫る物がなくて、手を伸ばしたら抱きしめられた。成り行きでしがみついたその背中是指先に違和感のない滑らかな感触だった。

「柳井、．．．好きだ．．．っ．．．」

最後に聞こえた荒木の声は切なくて、意識を手放したアタシの中に溶けて消えた。

第14話

猛烈に喉が渴いて起きた。

就職して早1ヶ月半。

その間酒のせいで記憶も所々抜け落ち、現在地が分からないという悲劇に見舞われた回数？。

最悪だ…。

昨夜というか、今朝方というか、荒木との甘く激しい時間は夢だったと信じたい。

だけど、何も身に纏っていない自分の姿に撃沈した。

「あゝもぉ…最悪」

荒木の姿を探して辺りをキョロキョロ見渡すが、どうも不在のようだ。

ベッドの上からも見える冷蔵庫を目指して体を起こそうとした時、股間に不快感を覚えて身震いした。

「なに、これ…」

太股の内側に伝う白濁の粘着質な液体を指で拭い、鼻に近づけて匂いを嗅いでみる。

クサイ…イカ臭い…

荒木との行為の証しがまだ体内に残っていた。

「アイツ．．．中で．．．．．」

非道な扱いに自分の身を案じて溜め息ばかりが出る。

煙草に火を点けて大きく吸い込むと、ゆっくりと鼻から煙りを吐き出した。

重い腰を叩きながら冷蔵庫を漁り、ドアポケットから水のペットボトルを取り出してラッパ飲みする。

少しずつ冴えてくる頭に怒りの二文字が浮かび上がる。

「ムカつく」

文句を言う相手も居らず、独り言を呟きながらバックの中から携帯を取り出すと、着信を知らせる青いランプが虚しく光っている。

確認すると、発信履歴の一番新しい番号と同じ番号が着信履歴に残っていた。

川島だった。

不意に罪悪感に苛まれた。

別に川島と付き合っている訳じゃないのに、後ろめたさを感じている自分がいる。

慌てて床に揃えて置かれた自分の下着と服を身につけた。

携帯のデジタル時計は13時と表示していた。

途端にお腹がへってきた。

ここが何処なのかも分からず、今まで使った事もない携帯のGPSで調べてみる。

まさか、こんな状況で使う事になるとは．．．。

「はあ．．．軽率だった．．．」

二度と酒は飲まない、と固く誓った時、この家の電話が鳴った。割と大音量の機械音に驚いて、とっさに受話器を取ってしまう。

「．．．．．もしもし、有紀？」

受話器の向こう側から聞き覚えのある声がした。

「誰？」

「そこ、うちだし」

不躰な質問にも淡々とした口調で答えている荒木が、昨日までとは違ってやけに馴れ馴れしく感じる。

「ってゆーか、今どこにいのよ！」

人の家の電話に勝手に出ておきながら怒りは止まらずに噴火状態。

なに下の名前で呼んでんの？

「今休憩室。今日早番で上がるからそれまで待っててよ。鍵1個しかないからさ」

文句を言おうとした時、通常より2倍増の声で荒木が脈絡のない事を言い出した。

「シャワーはキッチンの脇の壁についてるスイッチ入れればお湯出るから！．．．．．じゃあ、大人しく待っててね、有紀！」

遮られて口をパクパクしたまま電話は一方的に切られた。

「有紀って呼ぶなーっ！」

既に繋がっていない相手に向かって叫ぶと、乱暴に受話器を置いた。

どうやって夜の7時まで時間を潰すか途方に暮れる。

いつそのこと鍵を開けたまま家に帰ってやるうかと何度も考えたけれど、気の小さいアタシはそれも出来ずに荒木の帰りをただひたすら待った。

しばらくはテレビをつけてボーっとしていたけれど、家主不在の部屋がどうにも落ち着かなくてうろつろと歩き回り物色し始める。

深いネイビーのカーテンは1日中閉じたままで、真っ暗な部屋の中にはモノトーンで統一されたシンプルな家具が必要最低限置いてある。

海の底にいるみたい・・・

今こうして1人部屋にいと凄く寂しくて疎外感をも感じ、同情にも似た感情が生まれてくる。

荒木の飄々としたクールな雰囲気は、この部屋の中にいると違ったものを感じられた。

「…寂しいのかな？」

ノートパソコンを置いた片付いたデスクの前に座って、電源を入

れる。

徐々に荒木がわかってくる。

お気に入りに入ったサイトはバイク関係と、クラブ関係、結婚に関するものだった。

無機質なオーラの内側に隠された等身大の20代後半の男性そのままだった。

見てはいけない部分を見てしまったような気持ちになり、すぐにパソコンの電源を落とし、部屋の真ん中に体育座りをする。

一度かいた汗が乾いてベタついた肌をさする。

許し難い事をされたのに、荒木を嫌いになれない自分に気がついた。

「絶対同情だよ・・・」

気がつけば7時まであと30分を切っていた。

第14話（後書き）

結局よくあるパターンで事を運ばれてしまったけど、思わぬ方向に感情は傾いてしまう！？

第15話

見もしないテレビをつけてぼんやりしていた。
国内の悲惨なニュースが右耳から左耳へと通り抜ける。

とつくに7時は超えている。

この部屋に1人でいる間に、アタシはすっかり病んでしまった。

玄関の方からドアノブを回す金属音がして荒木の帰宅が分かったけれど、アタシには動く気力も体力も残っていなかった。

「ただいま」

電気もつけずに暗闇の中でテレビの明かりに照らされているアタシの頭を、荒木の大きな手のひらが優しく撫でる。

「おなか減ったでしょ」

そう言って渡されたコンビニの白いビニール袋の中にはおにぎりとサンドイッチとアタシがいつも夕方の休憩中に飲んでいる缶コーヒーが入っていた。

おもむろに取り出したおにぎりを食べていると、着替えを終えた荒木が後ろから抱きついてきた。

お腹にまわされた腕から荒木の体温が伝わってくる。

「今日も泊まっていくな？」

耳元で囁かれる甘い言葉も、今は食欲に押されて何も感じない。

「食べたらずります」

3分もかからないうちに完食し、更に缶コーヒーを一気飲み。荒木の驚きの表情もなんのその、食後の一服までしようとする始末。

「あ、もうタバコ切れちゃったんで一本下さい」

「ああ、はい．．．」

呆気にとられている荒木を後目にぶかーっと鼻から煙を吐き出した。

「じゃ、アタシ帰ります」

単純なアタシはおにぎりのおかげで体力が回復し、お腹にまわされた腕を振り払い何事も無かったように立ち上がって玄関へと向かう。

「あ、ちょっと待って！送ってくよ」

何度も断ったけれど荒木が送ると言ってきたかない。

飲まず食わずで長時間待たせてしまった罪悪感からか？

駅まででいいと言うアタシに家まで送るの一点張りだ。

「だって、昨日から風呂入ってないんだよね．．．。顔も．．．酷い事になってるよ」

言いくそくに渋い顔をする荒木に若干思い当たる節があり、洗面所まで小走りで戻って備え付けの鏡を覗き込んだ。

落ちにくいマスカラが微妙に落ち、ファンデーションも重ねて塗

りすぎてムラがある。何より、初夏の熱気で髪の毛がペタンとしてかなりオイリーだった。

「キモイ．．．」

鏡に映った自分の姿にショックを受けながら荒木の元に戻ると、情けない声を出した。

「送ってもらいます．．．」

不愉快なくらい荒木が大声で笑った。

「りょーかい」

荒木はマンションのエントランスの横にある駐輪場に入り、脇にある自転車を退かしながら割と大きめなバイクを押し出した。

「はい、これ被ってね」

「ご機嫌な荒木の笑顔に押され気味で訳も分からずヘルメットを渡される。」

「え、アタシも？」

「そう。俺捕まっちゃうからね」

仕方なく渡された半分だけのメットを被ると荒木が顎ひもを調節してくれる。

エンジンを吹かし、指で後ろに乗るように合図する。

タイトスカートを下着が見えるギリギリまでたくし上げ、荒木の

後ろに跨った。

「家どこ？」

「下北です」

マフラーを弄ったせいで爆音が響き、声を張り上げないと話しも出来ない。

振動が背骨を伝って全身に響き、アドレナリンが出てくるのが分かる気がした。

なるべく荒木に触れないように肩に手を置いていたら、その手を掴まれて腰に持っていかれた。

「肩じゃ危ないって」

メットからはみ出した荒木の長めの前髪が靡いてちょっと格好いいな…、なんてときめいてしまう。

「しっかり捕まってる」

バイクは住宅街をあつという間に抜けて、246号を横切った。自動車で渋滞している道をするすると通り、風を切って進んで行く。ぴったりと密着した荒木の背中から心臓が脈打つ音が直に伝わってきて不思議な気持ちになった。

結局マンションの前まで送ってもらってしまった。

「ありがとう…」

そそくさと降りてメットを外して手渡した。密着感が今更気恥ずかしくて俯いたまま歩き出したアタシに、荒木が声をかける。

「よかつたらお茶でも…とかないんだ？」

少し立ち止まって考えて振り返る。

それって図々しくないですかね…？

「ないです」

荒木は鳥の巣みたいな頭にムスツとした表情のアタシを愛おしげに見詰め、また明日ね、と言って帰って行った。

第16話

自分の部屋に着くと、たった1日しか経っていないのに暫く帰ってきていないように感じた。

窓を覗くとまだ荒木が上を見上げている。

視線こそ合ってはいるけど点けたばかりの電気のせいで部屋がバレたらしい。

「彼氏かっつーの…」

誰も居ない部屋に自分の声が響いた。

4階から見下ろす荒木は職場で見る彼と変わらずモデルのように恰好よかった。

ベッドに倒れ込んで目を閉じると暫くして例の爆音が聞こえた。

荒木が帰って行った安心感に体を起こし、重たい足を引きずってユニットバスに向かう。

無造作に脱ぎ捨てた服から自分じゃない匂いがした。

昨夜の自分の軽率な行動を洗い流すかのように熱めのシャワーを強くひねり出し頭からかぶった。

好きでもない荒木と体を重ね、記憶がほとんどないはずなのに快感を得た辺りだけは鮮明に覚えている。

遅ればせながら開発してしまった自分の性への嫌悪感に吐き気がするのと同時に、川島への仄かな想いに気付いてしまった。

荒木にされたのと変わらない傲慢な行為なのに、川島にだけ感じる切ない気持ち。

冷静になればなるほど見えてくる問題に危惧せざるを得ない。
考えれば考えるほど明日の出勤が憂鬱だ。

「綾子………マシでじゅめと」

第17話

休み明けの仕事はダルい。

出勤前にいつものコーヒーショップに入り、一服して気合いを入れてから職場に向かう。

「おはようございませーす」

ガードマンに挨拶をして社員通用口を通り、従業員専用エレベーターを待っている。と前の女性陣が何やら騒がしくて聞きたくもない会話が耳に入ってしまった。

「荒木さん彼女出来たらしいよ」

「えー、超シヨックなんだけどお。で、相手誰なの？」

「メンズの子でしょ？」

荒木さんってそんなに人気あるんだ？

驚きながらも昨夜の自分の軽率な行動に一抹の不安を感じてしまう。彼女が出来たばかりなのに私を家に泊めるなんて・・・本当にイケメンのする事はよく分かんない。

荒木に迫られたって感じてたことがアタシの勘違いなのか。だもしたらアタシは相当なオメデタイ女だ。

そんな事を考えて1人落ち込んでいるとエレベーターが止まった。ぎゅーぎゅー詰めのエレベーターに乗り込み一番奥の角に小さくおさまるとエレベーターが動き出した。

徐に顔をあげるとさっきまで荒木の噂話をしていた女の人と目があつた。

一瞬の沈黙の後、彼女の喉が息を飲む小さな音を立てた。

「.....」

驚いた表情は少しずつ歪み、細めた目でアタシを訝しそうに見詰める。

わざとらしい相手の態度に腹立たしさというより胸騒ぎを覚える。

ヤな感じ.....

見ず知らずの人にあからさまに嫌がられるような自分を疑問に思っ
って、念の為脇を匂ってみる。

アタシもしかして汗臭いとか？

そんなとんちんかんアタシの素振りを無視してその女は隣にい
る友達に耳打ちした。

「!」

耳打ちされた友達は大袈裟に驚いてアタシを振り返った。

肘で小突かれて慌てて前に向き直る彼女達の会話こそ聞こえない
が、鈍いアタシでもおおよその予測はついた。

昨日の今日で噂がたつなんておかしい。

一昨日の荒木との情事が頭をよぎる。

それと同時に彼女達のさっきの会話..。

もしかしてもしかするとそれってアタシの事でしょうか？

いやいやまさかこんなに近々で噂が回るなんてありえない。

だって流石に最後まで事を終えてしまったなんてアタシと荒木以外に…。

「!?!」

嘘でしょ？

嫌がらせとしか思えないこの仕打ち。

到着したエレベーターのドアの開ききらない狭い隙間から強引に身を振り出ると、もうダッシュで売り場に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2554e/>

龍を背負った男

2011年7月15日21時59分発行